

Team MAK-e Spot の和歌山市での活動報告 —— 「こども食堂」を基軸とした「第3の居場所」の定着と 多世代交流の可能性について検討——

An Examination of the Establishment of "Third Places" Centered on Children's Cafeterias and the Potential for Multi-generational Interaction

三岩真紀^{*1} 宮定章

^{*1} Team MAK-e Spot 代表

本報告は、こども食堂を基軸とした「第3の居場所」の定着と多世代交流の可能性を見出すための活動報告である。背景には、共働き世帯の増加や経済格差、コロナ禍による地域コミュニティの希薄化がある。事業では、食事提供、工作体験、学習支援、防災活動を通じて子どもの健全育成と地域交流を促進した。結果、居場所としてのニーズの高さ、世代間交流による社会的資本の醸成、保護者からの継続的实施要望が確認された。

キーワード：こども食堂 第3の居場所 多世代交流 地域コミュニティ 防災拠点化

1 活動の背景

近年、共働き世帯の増加に伴い、長期休暇中における家庭の育児・経済的負担が深刻化している。また経済的格差は体験機会の格差と比例し、こどもたちの学びや経験に影響を及ぼしている。

さらにコロナ禍以降、地域コミュニティの希薄化により「顔の見える関係性」や「こどもを見守る目」が不足しているため、社会的資本の再構築が求められている。

このような状況を踏まえ地域における居場所づくりと学習支援の重要性が高まっていると考え事業を実施した。

2 目的

本事業は、こども食堂を基軸とした「居場所」が長期休暇中における児童の健全な育成と地域住民の多世代交流を促進し、体験格差の縮小及び防災力強化を図ることで関係人口を創出することを目的として実施した。来年度の活動に向けてフォローアップを行うため、活動についてのアン

ケートを実施しており、そのアンケートより、伺い知れる視点を共有し、今後は学術的分析にも生かしていくための基礎資料とする。

3 活動内容

「①こども食堂における食事提供と工作体験を通じた居場所づくり」、「②学習習慣の定着を目指した学習支援」、「③こども食堂防災拠点化計画「防災くらぶ」開設」と三つの活動を行った。以下に、活動内容を記述する。

3.1 事業期間・場所・対象

①こども食堂における食事提供と工作体験を通じた居場所づくり

活動日：2025年4月～12月、原則月1回

場所：コミュニティスペース Do 場及び和歌山市地域フロンティアセンター

対象：地域の子どもと保護者

参加人数：445人（2025年4月～12月）



図1 子ども食堂の風景。元信愛大学 八代健志先生をお招きし、歌のコーナーも開催

②学習習慣の定着を目指した学習支援

活動日：2025年7月24日～27日

場所：同上

対象：小学生

参加人数：75人

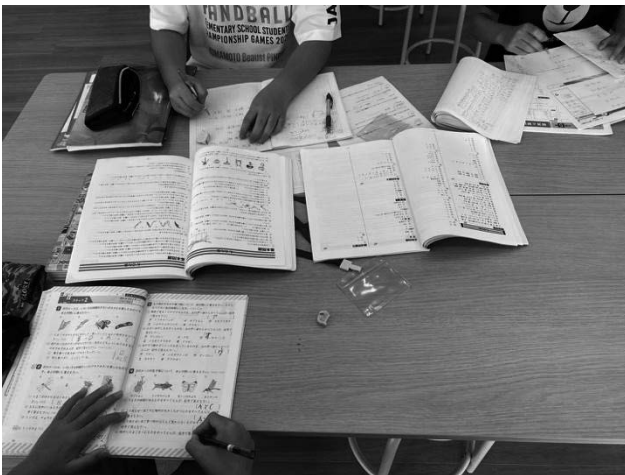


図2 宿題を側で見守ることに注力した学習支援

③子ども食堂防災拠点化計画「防災くらぶ」開設

活動日：2025年5月14日、6月9日、10月22日、10月29日

場所：同上及び和歌山市消防局防災学習センター、本町地区、大新地区

対象：地域住民など一般及び和歌山信愛大学宮定ゼミ

参加人数：68人



図3 子ども食堂防災拠点化計画における『防災くらぶvol.4』より備蓄食品計画選手権を開催

3.2 活動内容

①子ども食堂における食事提供と工作体験を通じた居場所づくり

夏休みに多分野の体験講座を開講し、学びの機会を提供した。これは「夏休み格差」といわれる問題解消への取り組みで、保護者からは「仕事で毎日忙しく、夏休みだからといって子どもにかまっていられぬが、この日は休みをとって、子どもとじっくり向き合い思い出づくりに繋がりたい」との声があった。子どもからは「何をやったらいいかわからなかったけど、一緒に工作ができてよかった」など、保護者や大人と一緒に制作することに安心感を覚える子どもが多かった。



図4 親子で工作体験に参加



図5 本町、大新地区の公衆電話の場所の確認や防災標識の確認

②学習習慣の定着を目指した学習支援

夏休みの午前中(9時から11時半まで)、こども達と一緒に宿題をやることを前提に開催した。こども達には「開始から20分間はおしゃべりなしで集中しよう!」と促したところ比較的みんな集中して学習に取り組むことができた。その後は自由とし、トランプやおしゃべりを楽しむなど男女関係なく楽しい時間を過ごしていた。保護者からは学童に行くほどでもなかったり、学童に対するシステムの提言なども聞かれた。

また夏休み期間中こどもを預かっている祖父母達からは「こどもを預かるのは体力的にもしんどい」「現代のこども達は塾ばかりでかわいそう。昔は外で遊んでいたらよかったけれど、今は暑くて外にも出られない」など近年の酷暑に対する子育ての変化に悩む声も多かった。

③こども食堂防災拠点化計画「防災くらぶ」開設

こども食堂における食事提供を有事の際の「炊き出し練習」と位置付けることで、運営側の防災意識向上を図ることを目的に、こども食堂防災拠点化計画を目的に「防災くらぶ」を立ち上げた。

まずはキックオフ事業として防災食配布や地域の防災マップ確認、講演など、意識を高めた。

防災食体験では、「あまりおいしくない」といわれる備蓄食品をいかにおいしく食べるにはどんな工夫が必要か、また賞味期限や匂いの問題なども考えた。アルファ化米を『はじめて見た』という学生も多く、「こんなプラスチックみたいなものを食べるの?」との声も上がったが、実食してみると意外にも美味しいことや、水でも調理できるがお湯で調理した方が炊き立て感があることから、有事の際にお湯を沸かすためにカセットコンロなど備蓄の必要性を示唆するなど発展していった。防災マップの確認では、身体障害者の方でも使用できる公衆電話が少ないこと、国際電話ではテレフォンカードは使用できないことなど知る機会となった。大新地区は歓楽街も近く、外国人籍の保護者も多く、改めて日頃の準備の必要性を再認識するとともに、これらを地域住民に周知する方法が課題となった。100均ストアの防災グッズの機能性や充実にも着目する機会となり、今後の備蓄の方向性や検討会に至るなど、スタッフの防災意識を『気軽に、楽しみながら』取り組む姿勢を促すきっかけにも繋がった。



図6 公衆電話における国際電話は100円硬貨のみ使用可



図9 BHELP インストラクターの隈絵里さんによる講義



図7 宮定ゼミの学生とも一緒にアルファ化米を作成



図10 和歌山信愛大学 宮定章准教授とゼミ生たち



図8 制作したアルファ化米を地域の方に配布することで防災意識の向上と顔見知りの関係性強化を図った。

また和歌山信愛大学 宮定章准教授をはじめ BHELP インストラクターの隈絵里さんをお迎えして、ゼミ生を対象に『地震発生時対応向上力ワークショップ』を開催した。学生からは「地域における支援活動には『人と人をつなぐ視点』と『備える視点』の両方が必要であるということ」を学んだ。災害時の行動だけでなく、日頃の備えや被災後のこどもの心のケアまで含めて考えることの大切さを学んだ。防災は日常の延長線上にあり、地域や居場所づくりと密接に繋がっていることを理解した」との声が寄せられた。

3.3 活動実施とアンケート結果より把握できたこと

活動の実施する上で感じたことと、アンケート結果を鑑みること、今後の研究課題に向けて、以下の三つの視点を抽出した。

① 居場所の優位性

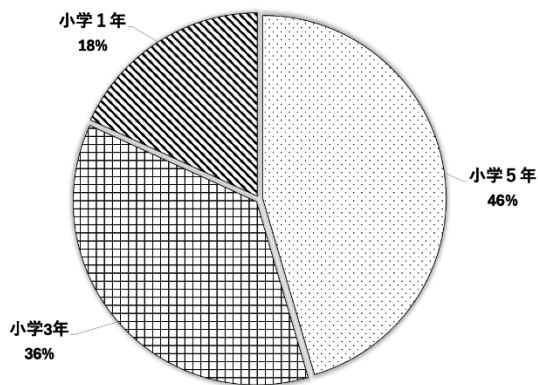


図11 居場所における参加者学年

低学年から高学年まで幅広く参加している。こども食堂は「食べる場」であり、どの学年でも関係なく利用しやすいのが特徴といえる。

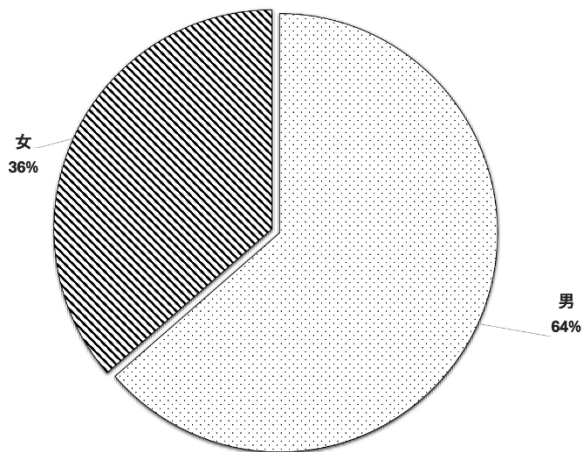


図12 居場所における参加者性別

イベントなど比較的女子生徒が多い傾向がある中、男子生徒が多いことは注目すべき点でもあるかもしれない。

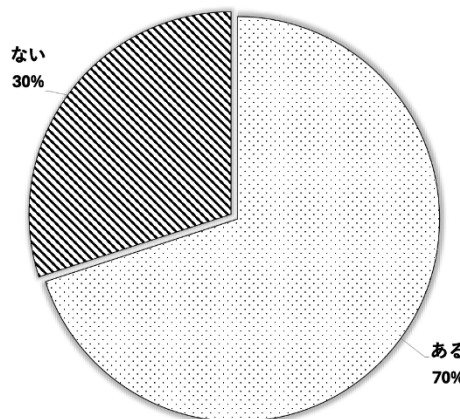


図13 自宅、学校以外でほっとする場所がありますか？

第3の居場所があると答えた生徒が7割を超えたというのはポジティブな兆候といえる。しかし、話を聞くと、友達や、祖父母の家ではオンラインゲームをやるなど好きなことを好きなだけやれる場所と捉える生徒も一定数いた。

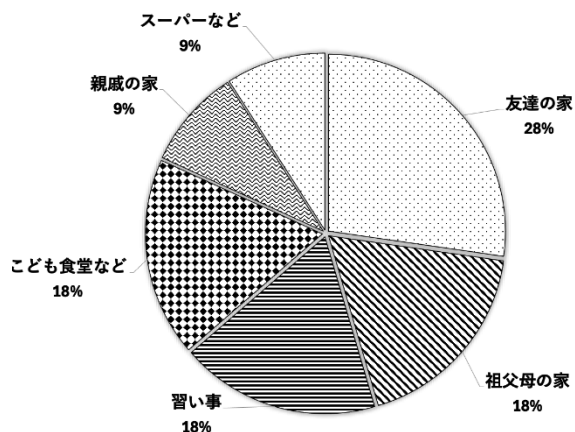


図14 お家の他の「居場所」はどこですか？

子ども達にとって身近なインフラ(図書館、コミュニティセンター、私設子育て支援拠点)だけでなく、スーパーなどパーソナルな空間を居場所と定義する子も増えてきていると考える。

子どもたちからは「友達と会えるから来る」「冬休みも開催してほしい」「ゲーム大会や夏祭りをしてほしい」など、居場所としてのニーズが多様に示された。コロナ禍以降、知人宅への訪問ハードルが上昇する中、公共施設におけるこども食堂や居場所が私的な空間(友達の家)に次ぐ選択肢として機能している点は注目に値する。

② 世代間交流による社会的資本の醸成

続いてこども食堂に参加した人を対象に多世代交流としての満足度のアンケートを実施した。

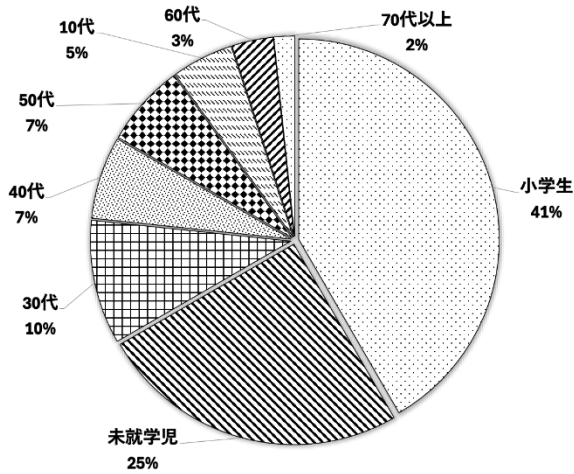


図15 世代間交流による参加者年齢

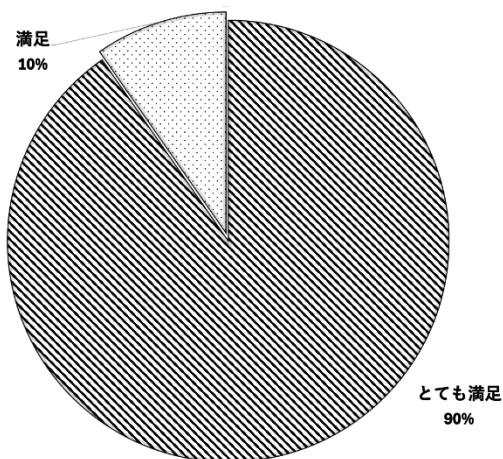


図16 世代間交流による満足度

高齢層（70代）からは「子供たちと顔見知りになり言葉を交わすことに喜びを感じる」との声があり、児童側からも「先生（大人）と話せて楽しかった」という反応が得られた。世代を超えた「顔の見える関係性」は、地域の安全網（セーフティネット）構築に寄与していることを示唆していると考えられる。

③ 潜在的ニーズと環境的要因

30代の保護者層からは「朝9時からの開館」や「通年実施」を求める声が高く、公的・私的の隙間を埋めることも食堂や居場所への高い期待と要望が寄せられた。

3.4 考察

以上の活動実施とアンケートを踏まえ、以下の視点が考察される。

- ① 継続性と普遍性: 「行けば誰かがいる」という安心感の醸成。
- ② 親しみやすさと達成感: 出席を口頭だけでするのではなくシールの活用や声かけなどによる子供の心理的報酬。
- ③ 居場所（サードプレイスの拡張）: 家庭（第1）や学校（第2）ではない「自分たちの場所」という帰属意識の提供。

4 今後の活動の課題

本報告の最後に、考察で得られた知見をもとにまとめ、次年度以降の課題を整理して終える。

活動の中で、子どもたちから「行けば誰かがいる」という声をかけられた。そこから、安心感が地域に根付いたと感じた。継続性と普遍性の観点から非常に意義深い活動であると思う。それは考察でも述べたが、声かけなど、参加者が親しみやすさと達成感を感じられる工夫を重ねることで、心理的報酬が生まれ、参加意欲の向上につながったと考える。家庭や学校とは異なる「自分たちの居場所」として、サードプレイスの役割を拡張し、子どもたちの帰属意識の醸成に寄与した点も特筆すべき成果である。これらの取り組みが、子どもたちに安心して過ごせる環境を提供し、地域全体のつながりを強化する一助となったと考える。

これらの成果を踏まえ、次に課題を整理する。

第一に、質的見守りの高度化が必要である。スタッフが児童の些細な言動を「SOS」や個性のサインとして捉え、観察眼を高めることが求められる。しかし、任意団体による運営が多く、専門機関との連携や経費面での制約がある。第二に、地域連携体制のシステム化が不可欠である。教育機関、民生委員、社会福祉協議会とのネットワーク構築を推進し、リスクケアや専門的支援の充実を図る必要がある。第三に、居場所情報の認知度向上や、子どもが「また来たい」と思えるプログラムの継続的改善、人材育成など、持続的な活動展開に向けた運営リソースの確保が課題である。

これらを背景にスタッフから出た想いは、「単なる管理で

はなく、児童と共に活動を創出する共創的なアプローチが重要」ということである。ただし、当団体スタッフ自身だけでは『どこまで出来るか?』という不安も表裏一体であることも確かである。

今後は、これらの考察と課題を踏まえ、更なる活動の充実と地域社会への貢献を目指して取り組みを続けていくと共に、課題解決に向けて、学術機関や行政機関等とも更に連携し取り組みたい。

謝辞

本報告書の作成にあたり、こども食堂の運営は、和歌山市社会福祉協議会や、和歌山信愛大学の大江嘉幸先生をはじめとする多くの皆様からのご寄付によって実現しました。加えて、学習支援の運営にご協力いただいた各講師の方々にも深く感謝いたします。

皆様のお力添えなくして、本事業を無事終了することはできませんでした。ここに改めて、皆様への感謝の気持ちを記して、御礼申し上げます。

参考文献

- 今井悠介 (2024) 『体験格差』 講談社
湯浅誠 (2021) 『つながり続ける こども食堂』 中央公論新社
和歌山県生涯学習課 『こどもの居場所』
<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/500600/d00217846.html> (令和8年1月6日閲覧)

